



説教要旨「主の光の中を歩もう」

イザヤ書 2 章 1 ～ 5 節・ローマの信徒への手紙 1 3 章 8 - 1 4 節

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。」

(イザヤ 2:4-5) 預言者イザヤは、“終りの日”の幻を見ました。彼はそれを破滅の時ではなく、救いの時として歌ったのです。その日には、もはや争う必要がなくなり、戦うための武具もその価値を失います。人を殺すための剣や槍は、食料を生産するための農具に、人を生かす道具に作り替えられる。そのように平和な世界の幻を預言者イザヤは見たのです。

そんな素晴らしい“終りの日”であるならば、一日も早く実現してほしいと思います。しかし、私たちは“その日”を待っている間、どのように過せばいいのでしょうか。ただ漠然と、時が過ぎるのを眺めているだけでよいのでしょうか。

パウロはこのように呼びかけています。「夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身にまといましょ」(ローマ 13:12) ここで身にまとうように言われている「光の武具」とは、抑止力だなどという言葉で正当化される軍事力ではありません。闇と対抗して、力比べをして打ち破ろうとする武力ではなく、闇をも包み込む大きな愛をパウロは「光の武具」だと語っているのです。

“終りの日”の情景をイザヤが歌ってから 2500 年あまりが経過してなお、この預言は実現していません。この世界を見回せば、いたるところで紛争が続いており、互いが互いの滅びを願っています。憎しみの連鎖を止めることはできないのだろうか、と絶望しそうになります。

預言者イザヤは滅びに向かうイスラエルにあって、武器が農具に、人を殺す道具が人を養う道具に作り替えられ、人々が手を取り合って主の光の中を歩んでいる。そんな幻を見ました。確かに人類がそのような道を歩むことができるとは信じ難いです。それでも、イザヤが見たこの幻を、私たちも共に追い求めて参りたいと思うのです。

(2020・11・29 説教者：稲垣真実)